

伊勢物語の書物

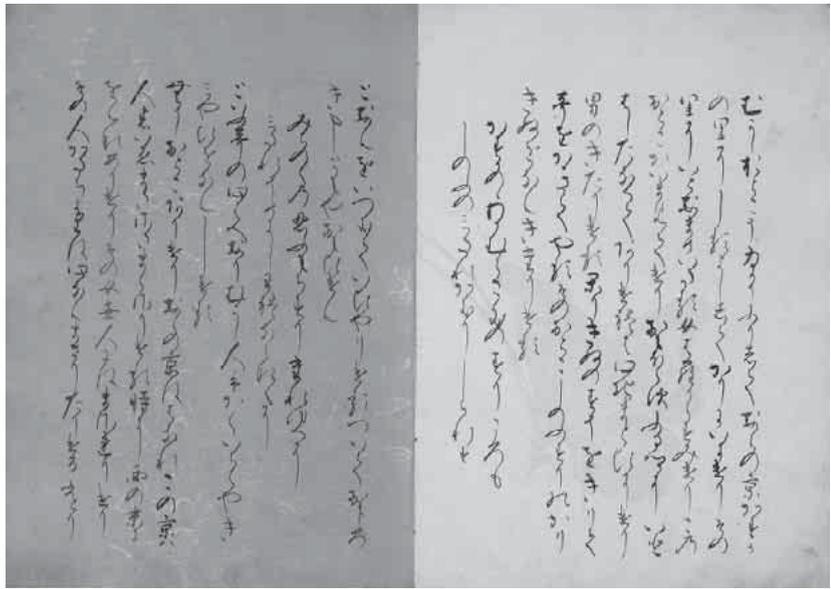
一千部以上の『伊勢物語』写本をご覧になったという研究者の方がおられるが、『源氏物語』に比べても、現存する『伊勢物語』写本の数は圧倒的に多い。それだけ多くの人に愛され、書かれ、読まれてきたということであるが、両作品の物理的な量の問題も関わっている。

概算で『伊勢物語』は四百字詰原稿用紙で七十枚程度、これが『源氏物語』だと二千五百枚くらいになる。室町時代の貴族である三条西実隆（一四五五〜一五三七）は、自身の日記『実隆公記』に「伊勢物語新写立筆」（明応七年（一四九八）八月二日条）と記した四日後に、「伊勢物語終書写之功」と書写を終えている。別のところでは「今日伊勢物語立筆、十余丁書之」（大永七年（一五二七）六月五日条）と記し、翌日にも「伊勢物語十余丁書之」とある。今の数え方であれば、実隆は一日に二十数頁書いていることになる（現存する実隆筆『伊勢物語』は本文だけで七十五丁前後、百五十頁くらい）。

さて、みなさんが『伊勢物語』を書くとしたら、いかがでしょうか。

（加藤洋介）

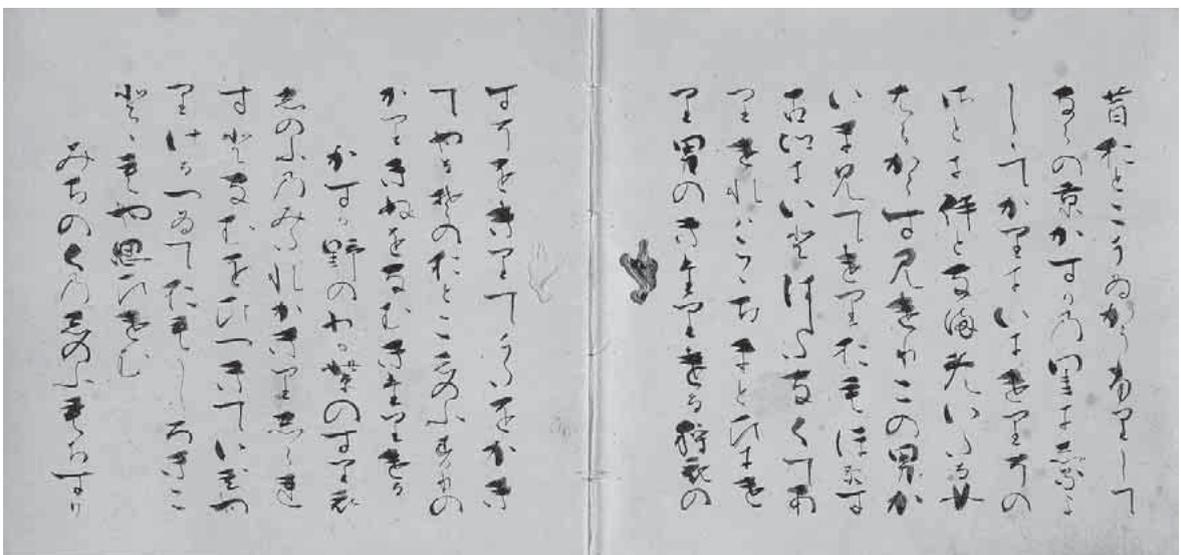
〔九八一—二〇四〕
〔江戸前期〕写
三三・五×二三・七種 列帖装一帖



奥書は記されず、極札等の文書も附属しない。附属する箱の蓋表に附された題簽に「伊勢物語 信尋公筆」とあるが、「信尋公筆」の部分はおとの文字を摺り消した上に記されており、伝来の途上で近衛信尋（一五九九—一六四九）筆の伝称が生じたと思われる。紅色や橙色などの鮮やかな色変わりの料紙に一面に胡粉を引き、蝶・藤・竹・菊・楓などの大型文様を雲母刷りして下絵とする華麗な装飾写本で、物語本文は、三藐院流（信尋の父・信尹（一五六五—一六一四）を祖とする書流）の書風で記される。信尋の筆跡とするのも納得される豪華な写本であるが、その真跡である確証はなく、今後の検討が俟たれる。図録1。

（海野）

〔九八一—二五〇〕
〔江戸前期〕写
九・八×九・四種 列帖装一帖



公卿烏丸光広に和歌を学び、俳人雛屋立圃（一五九五—一六六九）と親交するなど文雅を愛した大名であった筑前秋月藩初代藩主黒田長興（一六一〇—一六五）筆として伝わる写本。箱の蓋には黒田家の家紋である藤巴が摺られ、「長興公御自筆折本伊勢物語り御神体にて可祈候事」との墨書もあり、木釘で嚴封されていた形跡がある。藩祖の筆跡として祭祀の対象とされていたのかも知れない。長興筆か否かは未詳ながら、こなただ定家様の筆跡といい、物語を写す際の作法通り起筆が第一丁の裏側からである点といい、筆者の高い教養を感じさせる写本である。五三桐文緞子表紙。見返しには山・海辺の風景を描く墨絵あり。極小枱型本。定家本・武田本・流布本系統の本奥書を有する。図録8。（二戸）

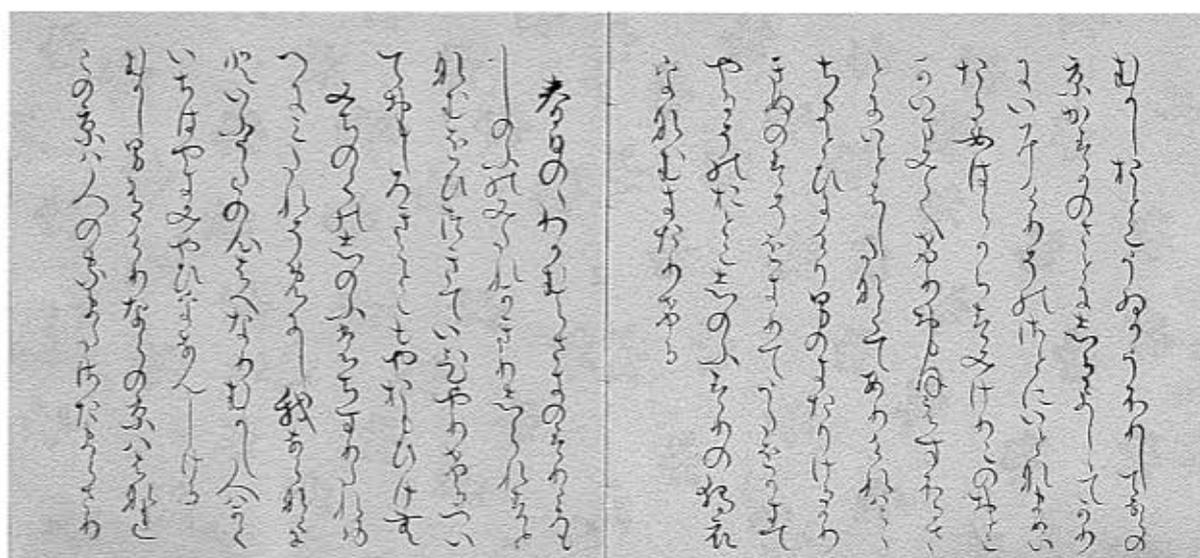
〔九八一—四四五〕
文政六年（一八二二）写
七・三×六・三種列帖装一帖



白河藩第三代藩主にして寛政の改革の際には幕府老中筆頭として政治手腕を振るつた松平定信（一七五九—一八二九）の筆写本。小さな料紙に細字で書かれていたが、隠居後の定信は同趣の豆本歌書を度々複製しており、掲出本もそのうちのひとつである。用字等が異なるものの本文は塗籠本（伝民部卿局筆本）系統に属する。塗籠本は屋代弘賢「参考伊勢物語」が校本に、増保己「群書類従」が底本に用いるなどこの時期注目を集めていた古写本で、定信もそうした周囲の学者達の動向に乗じて書写したのであろう。なお諏訪市博物館の蔵する文化四年（一八〇七）の定信写巻子本伊勢物語の本文は通行の定家本系統に基づく校訂がなされている。牡丹文綴子表紙。図録1。

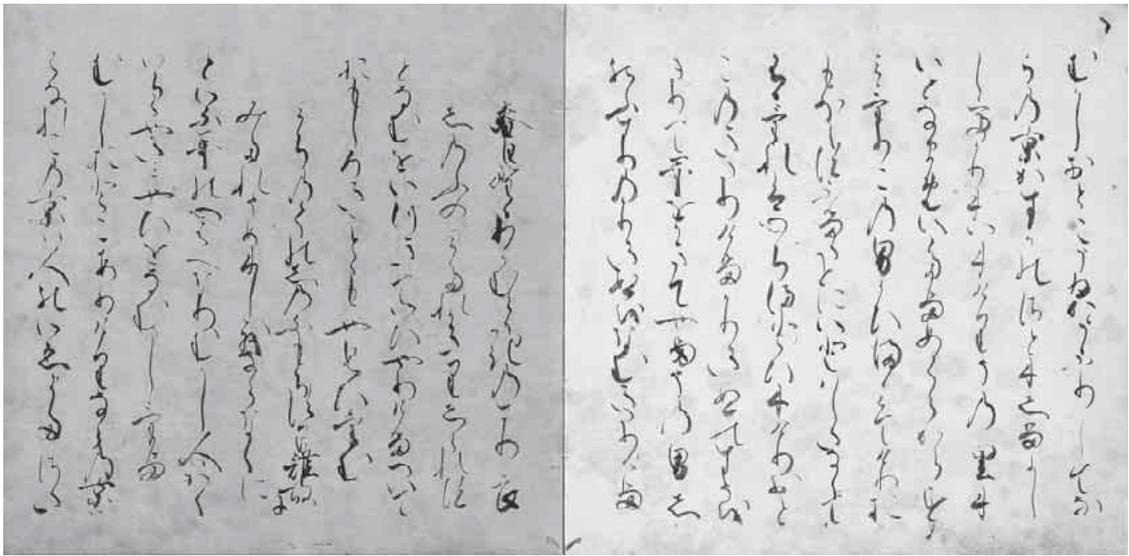
（一戸）

〔九八一—二九四〕
〔江戸前期〕写
一六・四×一八・五種単葉装一帖



奥書は記されず、極札等の文書も附属しないが、本書を取めた箱の蓋表に「伊勢物語（荒木素白真跡）」とあり、裏に「六半本全部 むかしおとこ 古筆了悦（花押）」と古筆本家十二代古筆了悦（一八三一—九四）による極書が記される。白茶色料紙に文様を雲母刷りする料紙に荒木素白（一六〇〇—八五）に発するとされる素白流の書風で書写される。仮名書にすぐれ、上代様の中興と評される素白を伝称筆者とする写本は少なくないが、奥書等が明記される例は僅かである。宮内庁書陵部蔵「頼基集」に「于時延宝七年（一六七九）霜月廿日行年八十歳素白（花押）」とある例などが基準作となるが、本書と比較するとその筆致はよく似通っている。素白その人の真跡の探求とともに、江戸前期に流行した素白流の検討にも有益な写本と言える。図録18。

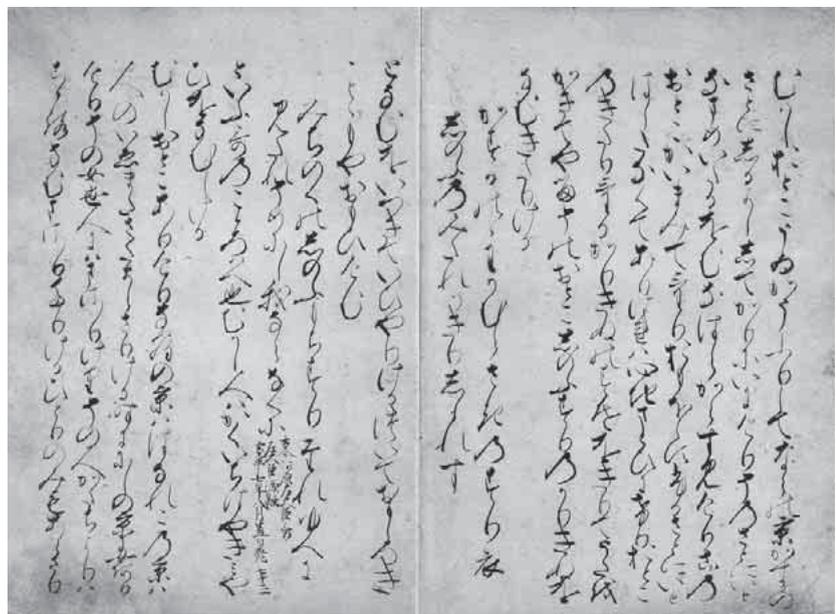
（海野）



〔九八一—二四八〕
〔江戸前期〕写
一六・九×一七・〇種列帖装一帖

奥書は附されないものの、巻末に古筆了佐（一五七二—一六六二）による万治二年（一六五九）の年紀を記した極書があり、中院通村（一五八八—一六五三）の筆跡であることが証される。通村は幾種もの書風を書き分けた能筆でもあり、筆跡の特徴から書写者を見極めることは難しいが、本に記される筆跡は通村のものとみて違和感はない。巻末に極書を附した了佐と通村とは同時代を生きた人物でもあり、本書が通村の真跡である蓋然性は高い。雲形・唐人・菱・水辺・獅子の丸文などを空刷りした色変わりの美麗な料紙に書写された、江戸時代前期の美意識を反映した逸品である。図録3。

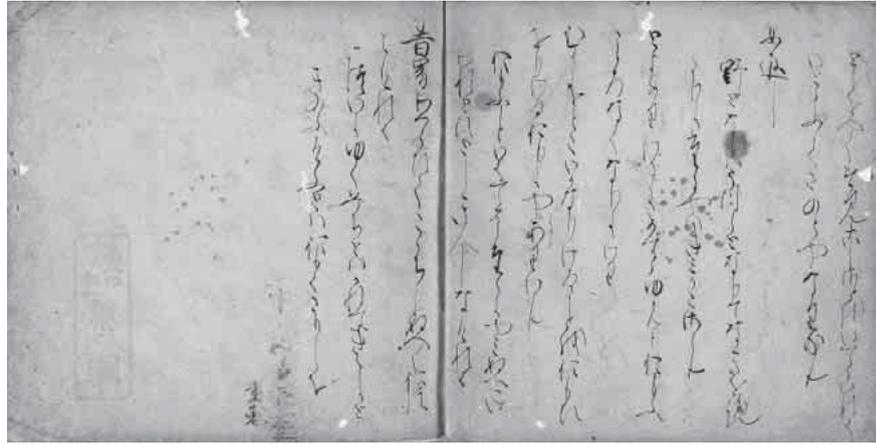
（海野）



〔九八一—五〕
〔南北朝期〕写
二四・九×二六・七種列帖装一帖

巻末に藤原定家の武田本奥書を記した後、貞治四年（一三六五）に冷泉為秀が將軍足利義詮に藤原定家筆の伊勢物語を献上した際に書き写し、手許に留めた本であるとの奥書を持つ。本書はその転写本。八月一日（朔日）の日付からみて、八朔という付き合ひのある者同士で贈り物を贈り合う当時の贈答儀礼によるものであろう。贈答とはいえ、上位の権力者からの「催促」とあっては苦渋の決断であったことが想像される。定家筆の武田本は今日に伝わらないが、この記事によれば冷泉家から室町將軍家に献上され、さらに後柏原天皇や細川幽斎の手許にあったことが他の伊勢物語の奥書から知られている。武田本の伝来を知るうえで貴重な資料である。図録1。

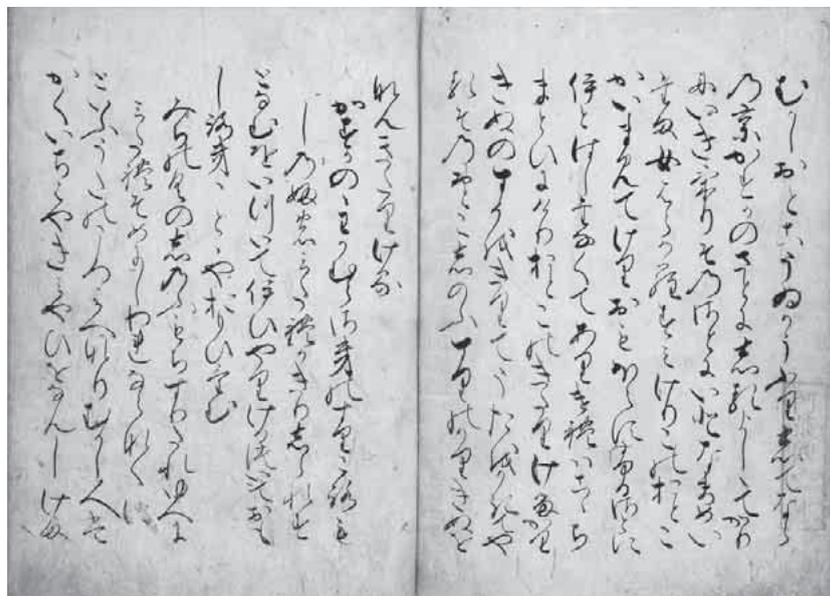
（加藤）



「九八一〇」
〔鎌倉末期〕写
一五・三×一五・一 種列帖装一帖

雲母引きの薄様斐紙を用いた優美な枳型本。紺地紋紗の布表紙（後補）で、前見返しは水色具引、後見返しは黄色具引の料紙に、それぞれ金銀泥で秋草を描く。初段より四十三段前半までを欠いており、もとは二帖であったか。巻末に別筆で「中宮寺長老也重恵」と見えるほか、本文中二箇所にわたって「中宮寺」の墨書が認められ、かつては奈良の尼寺中宮寺に伝来していたと思われる。長老とは住持を意味し、天文年間（一五三二～五五）に伏見宮貞敦親王の皇女高祐尊智の入寺以降、中宮寺の住持は宮家の皇女が継承したが、「重恵」については未詳。図録3。

（恋田）



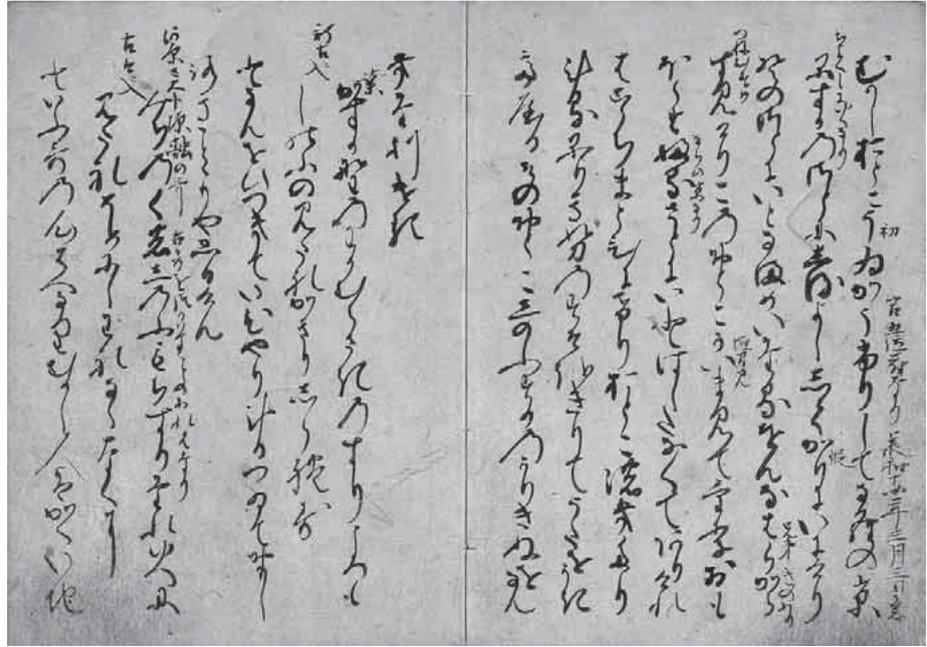
「九八一九」
暦応四年（一三四一）写
二三・九×一八・一 種袋綴一冊

巻末に「抑伊勢物語根源、古人説々不同」で始まる、藤原定家の根源本系統の奥書を持つ。さらにこれに続けて、「寛元四年三月廿八日」の明教、「文永九年十二月十二日」の定円、「暦応四年十一月一日」の順覚という三名の奥書がある。寛元四年（一二四六）は藤原定家の死後五年目にあたるもので、文永九年（一二七二）・暦応四年（一三四一）も鎌倉・南北朝期という古い年号であることが注目される。また「不忍文庫」（江戸時代の学者、屋代弘賢）、「阿波国文庫」（徳島藩主蜂須賀家）の蔵書印や「月明荘」（故反町茂雄の古書肆・弘文荘）の印を有しており、この本の伝来過程を知ることができるのも興味深い。図録1。

（加藤）

伊勢物語 伝一条兼良筆

〔九八一―一六〕
〔室町後期〕写
一六・四×二一・五種 列帖装一帖



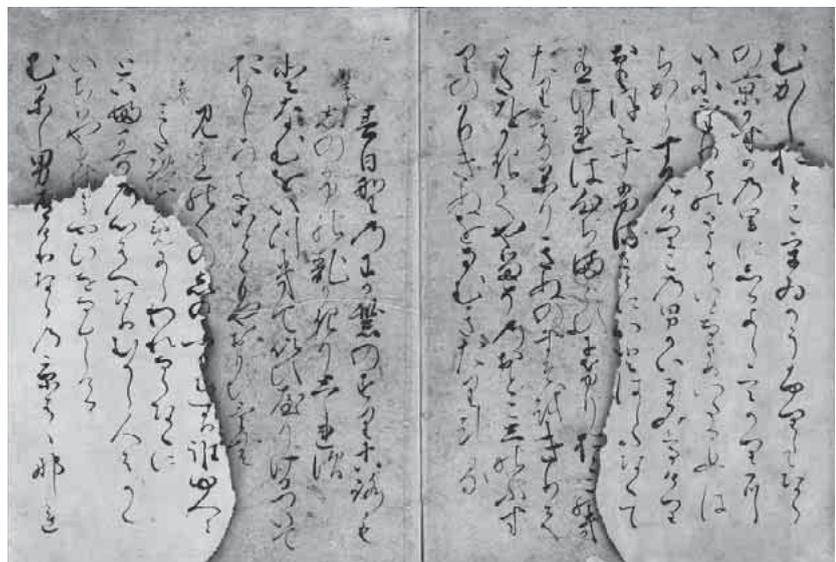
紺地七宝唐草金欄表紙で鳥の子紙の豪華な装訂。奥書は無いが、外箱に貼付された題簽や帙題に「一条兼良筆本」「伝一条兼良筆本」と書かれている。井上通泰旧蔵。七十五段途中から七十八段途中までを飛鳥井雅章（一六一―七九）の補筆とする井上通泰の極書が付けられている。一条兼良（一四〇二―八一）筆『伊勢物語』は数本が伝わっているが、本書は、兼良の筆跡とは認められない。なお、日本古典全集第三期八『伊勢物語』（日本古典全集刊行会、一九二八年）に影印が収められている。

（小山）

伊勢物語

三条西公条筆 冷泉為村補筆

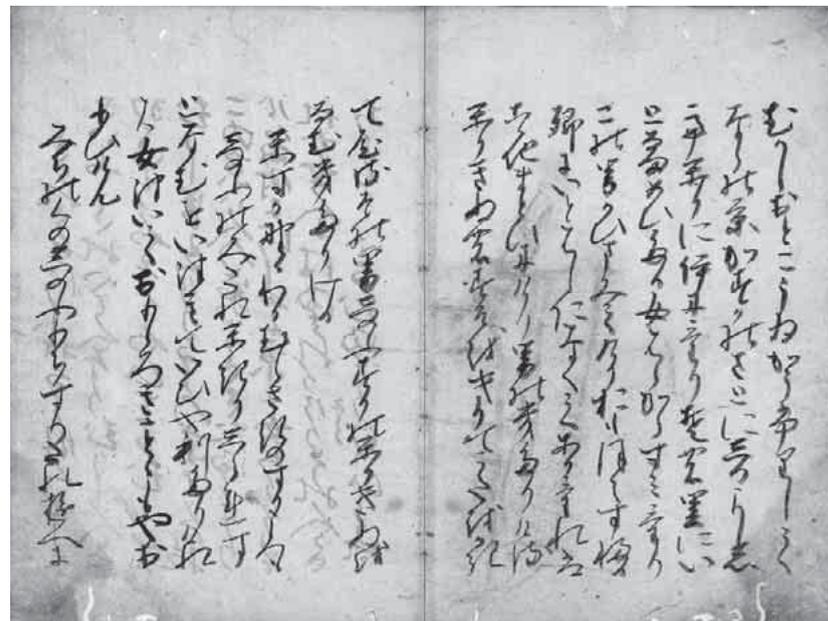
〔九八一―三三〕
〔室町後期〕写 宝暦七年（一七五七）補筆
二三・〇×一七・〇種 列帖装一帖



『伊勢物語』の写本。巻末にある宝暦七年の冷泉為村の奥書から、本文の筆者は三条西公条、外題の筆者は冷泉為久、本書は所々焼けて失われた部分があるが、そこを白紙で補い、為村が補筆したことが分かる。奥書の「此一帖よくぞ世にのこれる」という一文からは、本書の残存を喜ぶ為村の姿がうかがわれる。本書は「定家本」と同じく百二十五段二百九首からなるが、定家の奥書や勘物はない。公条（一四八七―一五六三）は、室町後期の公卿で実隆の子、歌学や古典学の最高権威として重きをなした三条西家を代表する一人である。為村（一七一二―一七四四）は江戸時代中期を代表する歌人で、冷泉家中興の祖。図録5。

（本廣）

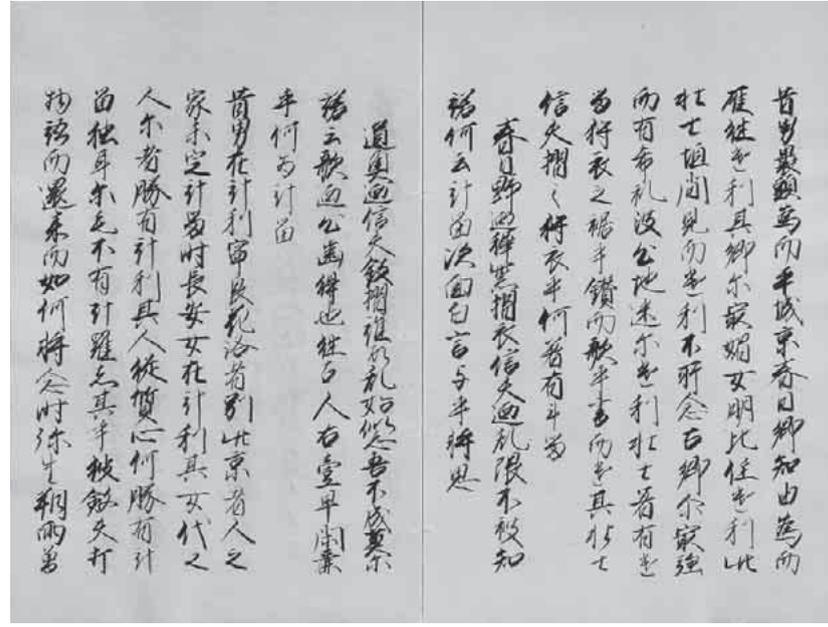
「九八―八」
〔室町期〕写
二二三・二×一五・六種 列帖装一帖



卷末に慶安四年（一六五二）近衛尚嗣（一六二二〜五三）によって書かれた
奥書があり、筆者を尚嗣の先祖の近衛基嗣（一三〇五〜五四）とする。これ
以外の定家本等の奥書を持たないが、「いひやりける」（初段）が「いひやり
たりければ女」のように他にまったく見いだせない本文になっていたり、「や
うやうあきかたにや思けんか、るうたをよみけり」（一二三段）が「よみよみ
ける」のように何らかの脱文を想定させるなど、本文の性格を定めにくいも
のがある。ただし、「といへりければ」（五十段）が「といへりければ女かへし」
のように非定家本や初期定家本にしか見られない本文に近いことは、注目さ
れるところである。図録5。

（加藤）

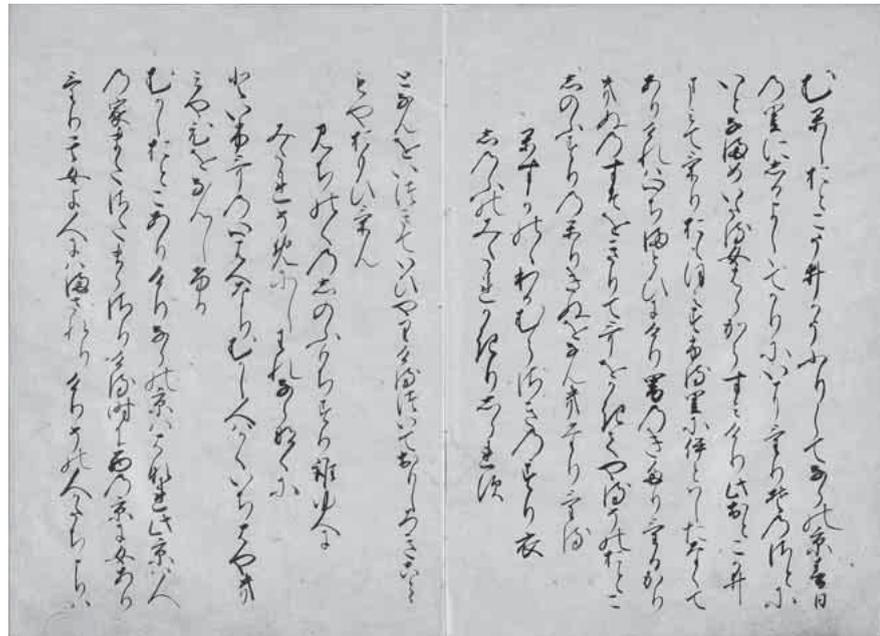
「九八―三三二」
〔江戸後期〕写
二四・三×一六・五種 列帖装一帖



真名本は、漢字のみを用いて万葉仮名風に本文を記した特異な『伊勢物語』の
伝本であり、寛永二十年（一六四三）に刊行された版本がよく知られているが、
写本も数本現存しており、本書はその一本である。本文にも定家本等とは異な
る独自のところがあり、『伊勢物語』の本文について考えるうえで重要な資料
の一つである。本書は奥書によれば、「日野中納言資矩」が「前権大納言」で
ある「余」の求めに応じて書写した本であるが、鉄心斎文庫にはこの日野資矩
（二七五六〜一八三〇）が寛政四年（一七九二）に書写した『伊勢物語』が存
していることも、このコレクションの裾野の広さを感じさせる。なお資矩は、
文政十三年（一八三〇）に七十五歳で没している。図録18。

（加藤）

〔九八―二六八〕
〔室町末江戸初期〕写
二四・五×一六・八 纏列帖装一帖



奥書は附されないが、巻尾に寛永十年（一六三三）の年紀を記す烏丸光広（一五七九―一六三八）による識語があり、細川幽齋（一五三四―一六一〇）の書写であることが証される。筆跡の特徴からみて幽齋による書写本と考えられる。光広の識語には、当該写本の途中に和歌一首の脱落があり、それを補写したことが記されるが、記載の通り四十四丁表の左端に「女」と記されていた部分を摺り消して上部欄外に転記し、空白となった部分に「いはまより」の一首が光広の手により補記されている。寛永十年の年紀のある古筆了佐の折紙のほか、三通の鑑定書類を附属する。図録18。 (海野)